

# 共に生きて

紙面についてのご意見、感想をお寄せください。メール、ファクスで受け付けます。郵送の場合は〒810-8721(住所不要)、西日本新聞生活特報部へ。

生活特報部 FAX 092 (711) 9056 メール seikatsu@nishinippon-np.

## 小さな命のキセキ



20

登山 万佐子

4月に始まった「小さな命のキセキ」。今回が最終回です。

在胎6カ月での早産、体重452g、重症の仮死状態で誕生した長女綾美(8)。過酷な条件の中で娘の人生は始まりました。今があるのは、綱渡りのような状態から救ってくれた医療と、24時間付き添ってくださった医師や看護師のおかげです。

先日、テレビ番組で新生児集中治療室(NICU)を特集していました。採血できる量や投与する薬の量、処置の一つ一つが、考えられないほど小さな単位だと説明する医師の姿に、主治医を思い出していました。しかも、赤ちゃんは言葉で伝えることができません。本当に神経を使う現場だと思います。

生後3日目、娘が脳内出血を起こして生死をさまよった日。保育器の中で、手のひらにすっぽり収まるほど小さな娘を必死に蘇生していた

主治医の姿が、今もはっきりとまぶたに焼き付いています。

NICU退院前、磁気共鳴画像装置(MRI)の脳の画像を見ながら説明を受けました。脳出血に加え、早産児に多い脳疾患「脳室周囲白質軟化症」も発症していました。

脳が広範囲にダメージを受けていることが一目瞭然でした。この結果、娘は脳性まひになりました。特に右半身のまひが強く、座ることも立つこともできない子でした。重度の未熟児網膜症に加え、視神経の損傷もあり、右目はほとんど見えていません

## 多くの出会いに感謝

大好きなミッキーマウスに喜ぶ綾美さん  
=2015年6月、千葉県浦安市



ん。大人が、娘のような眼底の状態だと生活に支障が出るほどだそうです。でも、眼科医に「子どもは不思議な力を持っているから」と励まされ、地道に視力の発達を促す訓練を続けました。今では、隣の部屋にある大好きなおもちゃはしっかりと見えるし、テレビを見るのも大好きです。

リハビリも1歳から毎週通いました。固く握りしめたままの右の手のひらが開き、右腕は自力で肩の上まで上げられるようになりました。今年に入って、短い距離なら手をつないで歩けるようになりました。この夏休みは腕に浮輪を付けて自由に泳ぎ始めました。

この8年間、「焦らず、気負わず、ありのまま」と、自分に言い聞かせながらの毎日でした。「私が早産していたければ…」という思いは一生消えないでしょう。でも、娘の誕生は多くを教えてくれ、たくさんの出会いをくれました。今は感謝の方が大きくなりました。今度は誰かの支えになりたい。それが、娘と私が生きて、今ここにいる意味だと思っております。

読んでいただき、ありがとうございます。娘の「キセキ」はこれからも続きます。(「Nっ子クラブ カンガルーの親子」代表、福岡県筑紫野市)

〓おわり